

【作品タイトル】

そのスーツケース、俺のなんですけど

【著者名】

石井 カヲル

【あらすじ】

くたびれた中年男の主人公は、妻の実家のある宮崎へと飛行機で降り立った。空港の受取場で荷物を待っていると、自分のスーツケースを堂々と持ち去ろうとしている男性を見つける。主人公にはどうしてもそれを失くせない理由があり、すかさず「そのスーツケース、俺のなんですけど」と声をかけるが――。

【特記事項】

実際にスーツケースを持っていかれそうになりこの話を書きましたが、私には妻どころか彼女すらいません。

そのスーツケース、俺のなんですけど

石井 カヲル

妻の実家のある宮崎は飛行機で行くと思ったよりも近く、二時間もかからなかった。仕事以外で飛行機に乗るのは久しぶりで、十年前の新婚旅行以来だ。機内では特にすることもなく、かといって窓の外の景色を見るほどの気力は残っておらず、ただ正面の避難経路の図を眺めていたら、いつのまにか無機質な着陸のアナウンスが聞こえてきた。機体が地面に着く衝撃を受け止めしばらくすると、せっかちな人から順に戸棚の荷物を降ろし始める。ある程度見送った後、タイミングよく座席から通路に出て人の波に乗る。機内から空港までの道のりは、自分の意思で歩かなくても流れが自動的に目的地に連れて行ってくれるようで楽だ。そのまま搭乗前に預けた荷物を受け取る場所に出る。バッグやら、スーツケースやら、持ち主の伴わないそれらはどこかくたびれていて、ベルトコンベアに乗って回転ずしのように移動させられている様からは、もの悲しさすら感じられた。

あれ……。壁に寄りかかりしばらく待っていたが、最後まで真っ黒なスーツケースは回って来なかった。ぼんやり流れていく荷物を眺めていただけで一つ一つ丁寧に見ていたわけではなかったが、確かに無かったと思う。国内線で、乗り換えもしていないのにロストバゲッジすることなんてありえないし、何かの手違いかもしれない。腋が湿り上腕に汗が伝っていくのを感じ、口内に溜まった唾を飲み込む。まずは職員を見つけて問い合わせようとあたりを見回す。カウンターは受取場内にはなく、少し先に進んだところにあるようだ。一旦そこまで行こうと歩き出すと、男性がトイレから俺のスーツケースを引いて出てくるのを見つけた。二十代後半くらいで、スラックスに半袖のワイシャツを着ているサラリーマン風の見目だ。小走りで近づき、なるべく柔らかく、角が立たないような口調で話しかける。

「あの……。そのスーツケース、俺のなんですけど」

「え？　そうですか？　違うと思いますけど。勘違いじゃないですか？」

ゆっくり顔だけこっちに向けたかと思うと、男性はすぐに斜め下を向き歩き出そうとする。

「いやいやいや、ちょっと待ってください。」

俺は男性の前に回り両方の手のひらを向け、立ち止まらせる。

「この傷の感じとか、へこんでるところとか……絶対俺のです」とスーツケースを触りながら指摘をすると、男性は迷惑そうな顔をして頭を軽く掻き「違いますって」と否定する。

「……あ、そうだタグは？ 預けた時のタグ、付いてますよね？」と俺は持ち手の部分を指さす。

「タグなんて捨てちゃいましたよ。本当急いでるんで勘弁してください」

男性は手を広げて持ち手を見せ、さっきより強めの語気で言い放つ。

「じゃあ、中身見せてください。それで確認しましょう」と俺が一步距離を詰めると、男性はいい加減にしてくれと言わんばかりに嫌そうな表情を見せ、「……できません。会社の機密物が入っていて、一般の方には見せられないんです」と言った。

一瞬、俺の方が疲れて見間違いをしているのかもしれないという考えが頭をよぎる。何も返せないでいると、隙を見つけたように「じゃあそういうことなんで」と正面の俺を避け、男性は再び速足で歩き出した。

「待ってください……！」

俺は咄嗟に男性の袖を掴み、無理やり足を止めさせる。

「その荷物、本当に大事な……大事なものが入ってるんで、絶対に失くせないんです。お願いしますから、中を開けて確認させてください」

頭を下げる。どうしてもここで行かせるわけにはいかない。

「それはそっちの事情ですよね？ 僕には関係ないんで！」

男性は俺の手を強く振り払って、また一步踏み出そうとした。

「お願いします！」

俺のかすれた大声が手荷物受取場のただっ広い空間に響く。役割を失ったベルトコンベアは機械音を立てながら、我関せずとひたすら回り続けている。男性は、深く下げた俺の後頭部をじっと見ている。しばらく沈黙が続く。

「……何が入ってるんですか？」と男性は尋ねる。他人に言うことではなかったが、あきらめて話す。

「そのスーツケースにはね、骨壺が入ってるんです。……妻が亡くなりました」

てね。お墓に入れるために、飛行機で一緒に来たんです」

妻の癌がわかったのは、つい半年前のことだった。調子が悪いと病院を受診すると、そのときには既にステージ4で全身に転移してしまっていた。最初に説明を受けた時点で余命三か月と言われていたが、それ以上に頑張って生きてくれた。病床では、自分のことを憂うより俺のこれからの人生を心配してくれた。最後に過ごした月日はあつというまで、人の命は儂く、散るときは一瞬にして散ってしまうのだということを感じさせられた。

俺たちは子供のいない夫婦だった。お互い三十五のときに結婚し、十年連れ添ってきた。新しい命を宿することはできなかったが、その分二人の時間を楽しんだ。平日は一緒に料理を作り、休みの日にはいろいろなところに出掛けた。毎日明日が来るのが楽しみで、これからも幸せな日々が続いていくはずだった。

妻は飛行機が苦手だった。「あんな鉄のカタマリが空を飛んでいくのが信じられない」と常々こぼしていた。新婚旅行のときだけなんとか説得し、オーストラリアに行った。家で妻の遺品を整理していると、そのときの写真が何枚も出てきた。エアーズロックの前でポーズをとる二人の姿はまだ若く、希望に満ち溢れた顔をしていた。空港で撮った写真には、この黒のスーツケースも映り込んでいた。「楽しかったけど、もう飛行機乗らないからね」とかわいく膨れていたのも、昨日のことのように脳裏に浮かぶ。

宮崎に帰省するときは、毎年新幹線と特急を乗り継いだ。移動は丸一日かかったが、大阪や広島に寄ったり、ゆっくり二人で旅をすることができてよかった。あんなに一緒にいたのに一度もギスギスしなかったのは、妻のやさしさのおかげだったと思う。本当に好きだった。いつまでも生きていてほしかった。

葬式を終えてから、妻の両親に実家に置いておきたい思い出のものを選んでもらった。二人は妻と同じように電車で宮崎へと帰ったが、俺は仕事の都合で移動に時間をかけられず飛行機にしたのだ。

スーツケースには、妻の遺骨と思い出の品が入っている。婿養子である自分には、これを確実に妻の実家へと届けなければいけない義務がある。

「だから……お願いします」

もう一度頭を下げる。

「……わかりました。いいですよ」

こちらの誠意が伝わったのか、男性は落ち着いたトーンでそう言ってくれる。俺は顔を上げ男性の方を見る。

「でもその前にちょっとトイレ行ってきていいですか？」

「はい……いいですけど……。」

男性は小走りにトイレの方向に向かった。と、思ったら直角に曲がり猛スピードで出口へと駆け抜けていった。

「え？」と俺は開いた口が塞がらなかったが、すぐに我に返りスーツケースのジッパーを引いた。開くとそこには確かに骨壺と、妻の卒業アルバム、ときどき着ていた着物などがあつた。なんとなく骨壺を手に取り、抱きしめる。中身が無事だったことに対する安堵、亡くなったことへの実感と、妻と出会ってからの記憶が同時に押し寄せ、溢れ出す感情は抑えられない。今日までの間、現実感がなく涙を流すこともできなかったが、何かの糸がプツンと切れたように、俺は声をあげて泣き崩れた。もう誰もいなくなってしまうとした受取場は、既にベルトコンベアも動いておらず、時が止まってしまっているかのようだった。

しばらく泣いた後、次の便の乗客がぞろぞろと歩いて来るのを感じ、急いで骨壺を戻してスーツケースを閉めた。鈍く黒光りする傷だらけの側面には、すこしすっきりしたような表情をする中年男の顔がぼけて写っていた。ふと横を見ると、新しい荷物が暗い空間から次々と流れ出てくる。俺は涙をぬぐって立ち上がり、出口の自動ドアに向かって歩き始めた。

停留所で駅に向かう高速バスを待っていると、何やら人が暴れているような声が聞こえてきた。よく見ると、先ほどの男性が警備員に取り押さえられている。近づいて野次馬の一人に聞いてみると、どうやら男性は常習的な空港窃盗犯らしい。振り返り、俺はバスに荷物を積み込む列に並び直した。

このスーツケースは俺と妻の大切なスーツケースだ。